

ずっと一緒に

堺市立原山台中学校 二年

永嶺 ながみね大雅 たいが

僕には、同じ年の弟と姉がいる。二人とも僕とは違う学校へ通っている。僕は姉や弟のことが好きだ。姉や弟も僕のが好きだと思う。「思う」というのは実際に聞いていないからだ。姉と弟には重度の障害があり、自由に動くことや意思疎通をすることが難しい。しかし、生まれてからずっとそうだから、今まで、なんとも思っていないかった。でも、この頃、急に腹が立つことがある。

それは、弟と出かけている時にいつも起こる。ゆっくり食事をしていても、楽しくゲームをしていても、誰かが、ずっと弟のことをもの珍しそうにじっと見ている。時には立ち止まって、わざわざ見にくる子供もいる。その子供の手を引っ張り、逃げるように去る親を見ると、もっと腹が立つ。弟は何か悪いことをしたのだろうか。椅子に座って移動をしていることがそんなに珍しいのだろうか。なぜ、親は説明もせず逃げ去るのだろうか。僕はその時、怒りで冷静さを失う。殴りかかるふりをしたり、小さな声で暴言を吐いたりしてしまう。その度に、母に「放っておきなさい。」と止められる。なぜ母は放っておけるのだろうか。

ある日、いつものように弟のことを珍しそうに見ていた子供に、怒りが湧いて力が入ってしまい、手に持っていたポップコーンを床に投げ落としてしまった。母が「拾いなさい。」と言うので、僕は、散らばったポップコーンを這うようにして拾った。周りの人の注目を集めてしまい、なんて意味のないことをしてしまったのだらうと後悔した。その時の僕の行動は珍しかったに違いない。

その後、冷静を取り戻してから、母に何時間もさとされた。

「一時的な感情で行動するな。考えなさい。なぜ、他の人達は弟をジロジロ見るのかよく考えてみなさい。理由は必ずある。それとも許せないのならば、アンタが弟と一緒に歩かなければいい。それで解決するし、それでも構わない。」
と、母は言った。

僕は、弟が楽しくて仕方がない時、手足を激しくバタバタさせ、引き笑いをするのを珍しいと思ったことは無い。口からこぼさないように必死にご飯を食べていて、変な顔になってしまうのも、おかしいと思わない。座っている姿勢が崩れて戻らなくなってしまい「助けて。」と、もがいている姿も日常茶飯事で、「またか、しっかりしろ。」と戻してやる。たまに引き笑いが聞きたくてわざと笑わせたりする。

他の人は、弟のことを毎日は見えていない。明らかに違う動きをする弟を珍しく思うのかもしれない。床に這いながらポップコーンを拾っている僕のように。

だからと言ってジロジロ見ることが良いとは思わない。許そうとも思わない。弟は普通になっているだけなのに。

姉や弟のように多くの人と違う特徴を持つ人が世の中にはたくさんいるはずだ。その人達や家族も、僕と同じように、嫌な気持ちになっているのだろうか。だとしたら、堂々と出かけることができる、食事ができる、歩くことができる世の中になって欲しい。そうでなければならぬ。そのために、世の中を作っていく努力をするのは、弟のそばにいる僕や家族なのかもしれない。

だから、

「僕はこれからも弟とずっと一緒に歩く。」

母にそう宣言した。